

令和 6 年 5 月 7 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 令和4年度

受付番号 202260141

氏 名 松尾 梨沙

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1-1. 用務地（派遣先国名）用務地： パリ （国名： フランス ）

1-2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。
ショパンの音楽とフランス文学の比較研究－Fantaisieをキーワードとして

1-3. 派遣期間： 令和 4 年 9 月 1 日 ～ 令和 6 年 3 月 28 日（ 575 日間）

1-4. 受入研究機関名及び部局名

受入研究機関名： パリ第3大学（Université Sorbonne Nouvelle）

部局名： 比較学研究センター（CERC - Centre d'Études et de Recherches Comparatistes）

【記載事項】

- ・ 研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等

本研究課題は、フリデリク・ショパン Fryderyk Chopin (1810-49) がワルシャワを出た 1830 年からパリで亡くなる 1849 年までを対象に、彼と交流のあったフランス文人、芸術家との接点について調べた上で、ショパンの作曲スタイルや楽曲と、フランス／ポーランドの文学（特にジョルジュ・サンド George Sand、アダム・ミツキエヴィチ Adam Mickiewicz の作品）との比較分析を行うものである。それにより、同時代のポーランド、フランスが置かれていた政治状況や宗教・ジェンダーといった問題に対し、彼らの創作活動がどのようにそれを反映させていたかを明らかにすることを目的としている。

【派遣一年目（2022 年 9 月～2023 年 8 月）】

博士課程以降これまでポーランドを拠点とし、ショパンとポーランド詩人たちの関係や作品について研究してきた報告者にとって、フランス、パリを拠点とした長期滞在研究は初めてとなることから、一年目は特に研究環境をできるだけ早く知る必要を感じ、積極的に所属先であるパリ第 3 大学・比較学研究センター（CERC）の主催セミナーや講演会に参加し、加えて同センター所属研究者らが連携する社会科学高等研究院（EHESS）やパリ政治学院（Sciences Po）、パリ・シテ大学といった研究機関との合同セミナー、共催学会にも出席した。これら様々な研究会への参加を通して、報告者の研究領域でもある「比較文学」が、フランスではより幅広く学際的に取り組まれているだけでなく、大半の研究者らが、社会や政治と文学・芸術を密接に絡めた研究課題に取り組んでいることを知った。人文学が人間について考える学問である以上、人間が形成してきた社会の状況が研究内容に入り込んでくることはごく自然なことのようと思われるが、意外にもこの点が日本では（少なくとも報告者が知りうる限り）積極的に取り組まれてはいなかったことから、研究者としての問題意識や、研究の射程を定める上でも重要な経験となった。

一年目は、そうした中で報告者自身が研究発表を行ったものとして、2023 年 5 月に行われた、パリ第 3 大学 CERC とパリ・シテ大学 CERILAC との共催学会「民族詩学の未来」

(<https://u-paris.fr/cerilac/colloque-les-arts-de-la-parole-au-dela-de-la-grande-division-futurs-de-lethnopoetique/>) がある。これまで英語かポーランド語で発表を行ってきた報告者にとって、これが初めてフランス語ネイティブの専門家を相手にフランス語で行った発表・質疑となったが、これまで日本でもポーランドでも、「詩学」と「民族学」が結びついたテーマ設定での学会に出会したことがないのに加え、報告者のこれまでの研究がまさにポーランドとそれに隣接する複数の地域の民族言語を元にした内容であったことから、まずはこれまでの自身の研究をフランスの研究者らに知ってもらい、彼らの意見をもらうことを意図して発表を行った。他には主にフランス国内と、スイスのフランス語圏（ジュネーヴ大学）の研究者や、中南米の学術機関に籍を置くフランス人研究者などが発表したが、テーマとしてインド、中国、ブラジル、カリブ海地域、アメリカ、ギリシャ、日本等々世界の幅広い地域の詩学が扱われた。その中で、スラヴ語圏地域の詩学を扱い、楽曲分析など音楽学の専門的な側面からアプローチしたのは報告者のみであったため、聴衆の関心を集めることができ、発表後には他の参加者らから様々に高評をもらうことができた。特に報告者と同じ CERC 所属のインド詩学研究者からは、「ショパンという我々にとってはピアノ曲、つまり器楽作品の作曲家というイメージしかなかったところに、ポーランド=ウクライナ土着の詩や歌の分析が論理的に結びつけられ発表されたので、驚くとともに興味深く、説明もわかりやすかった」という具体的なコメントを頂け、成果に手応えを感じることができた。

こうした自身の経験を、同僚の研究者たちも巻き込みながら形にすることはできないかと考える一方で、居住していたパリの研究者用宿舎が研究機関としても機能しており、居住者自ら講演や学会を企画することも日頃から推奨されていたこと、また 8 月だったら日本人の研究者でも海外出張・研究滞在をする時間が比較的取りやすいということに鑑み、2023 年 8 月 11 日に報告者の自主企画として、主にパリで活動する研究者と日本の研究者とを集めた国際研究集会を開くことに決めた (<https://www.fmsf.fr/agenda/comparing-comparative-literature>)。集会のテーマは「『比較文学』を比較するー日本、ドイツ、フランス、そして世界 Comparing "Comparative literature" – Japan, Germany, France and the world」とし、国際比較文学会 ICCLA でグラフィック小説の研究グループを組織している教授に基調講演をお願いし、他には日本、アメリカ、フランスの所属機関から全 4 名の若手研究者が参加し発表を行った。参加者の専門分野が多様であったにもかかわらず、報告者の「パリで行われている比較文学研

究」の経験が作用したのか、結果的に参加者全員に共通していた問題意識が「文学（テキスト）と社会」であった。それを踏まえ会の最初の趣旨説明では、まずこの集会在「従来「比較文学」と呼ばれてきた領域について、それは本当に世界共通のものとして定義できるのか」を再考する意味で組織したことを述べた。基調講演でも指摘されたが、そもそもゲーテによる世界文学概念辺りから「比較文学」が起きてきたため、その発想自体は大体 19 世紀以降の比較的近代のものに過ぎず、そうした歴史的経緯からいくつかの「比較文学研究メソッド」（翻訳論、各国詩学等々）が今日まで形成されてきた。しかし最初の発想に立ち戻るならば本来「学術分野的枠組を作る」ものではなく、結果的に一言で「比較文学」といっても、現在では国や地域によって扱われやすいトピックにも違いがあり、例えば上にも記したように、実際に日本では「文学と社会」はフランスほど扱われていない。他方、今回の集会でテーマを「比較文学」と設定したところ、全員の問題意識に社会学的要素が含まれていたため、これは世界情勢や我々の日常生活において文学やテキストが果たす役割を考える上でも、良い機会となることを強調した。そこでは報告者自身、この一年 Sciences Po や EHESS との合同セミナー参加で経験したように、独裁政治、紛争、大量虐殺、デモや民主化運動など現代世界・社会に結びついた文学研究の成果を目の当たりにしたことが、本企画の最大の基盤となっていることも述べた。

なお参加者各自の発表内容は 2024 年度中にオンライン発信できるよう現在準備中である。また、当日聴講に来た研究者のうちの一人が同企画に強い関心を示し、次回は共催でやってくれないかとの申し出があったため、2024 年 6 月にこの企画の続編として第 2 回研究集会 *Rethinking the Novel* を現在計画中である。

【派遣二年目（2023 年 9 月～2024 年 3 月）】

派遣一年目は、本研究課題のうち特に 1840 年前後におけるサンドの小説の読解と、ミツキエヴィチに対するサンドの評価、あるいはショパン、サンド、ミツキエヴィチ 三者の交流や書簡などを中心に、主にパリ（パリ第 3 大学附属図書館 *Bibliothèque Sorbonne Nouvelle*、ソルボンヌ大学共同図書館 *Bibliothèque Interuniversitaire de la Sorbonne*）で資料収集を行った。それを踏まえ派遣二年目は、パリ以外の地域で彼らの痕跡を探るべく、ポーランド（ワルシャワ）やマヨルカ島への出張を行った。

まず 2023 年 9～10 月の 2 ヶ月間はワルシャワに滞在し研究を行った。資料についてはワルシャワ大学図書館（*Biblioteka uniwersytecka w Warszawie*）で収集を行ったが、報告者が以前ワルシャワを研究拠点としていた時期にショパンとミツキエヴィチ自体に関する資料はかなり収集済みであり、今回はサンドのポーランド受容に関する研究書や、国立フリデリク・ショパン研究所（NIFC）が新たに出版したショパンとその時代のポーランドの文学状況に関する書籍以外には、あまり目新しい資料は見つからなかった。

また、ワルシャワ大学ポーランド文学研究所所長 Witold Sadowski 教授からは、この 2 ヶ月間の調査滞在のための招待状を頂き、ミツキエヴィチの作品に関する議論と、サンドの作品に含まれる「スラヴの歌」の引用元に関する相談を行った。10 月には NIFC が主宰する第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールが開催され視察したが、5 年前に開催された第 1 回コンクールと比較すると審査基準の不明瞭さがさらに度を増しており、モダンとピリオド双方の専門家が入り混じるコンクールの難しさを露呈する事態となっていた。各時代・各種類の楽器を演奏家にも聴衆にも再考させるという学術的意義の深いアイディアだけは今後日本の音楽教育面（大学や博物館など）にも生かせると思われ、今後は報告者がこれまでに共同で取り組んできた日本の楽器製作家や、ピリオド楽器奏者を目指す若手演奏家ともその点について議論を深めていく予定である。

さらに派遣一年目に行った自身の研究の最初の成果として、2023 年 10 月 17～20 日にドイツ、フライブルク教育大学で行われた国際学会「ヴァイマル三角連合におけるヨーロッパ文化関係」

（https://creg.univ-tlse2.fr/medias/fichier/programme-colloque-triangle-de-weimar-freiburg-2023_1696881070290-pdf）で発表を行った。ここでは、フランス・ドイツ・ポーランド三国全ての文化要素を絡めるという学会のコンセプトに沿って、サンドとミツキエヴィチの作品をさらにゲーテの作品と比較し、特にキリスト教思想と各国の政治状況という点で、前二者と後者の違いが三国の歴史的立場の違いを表していることを示した。聴衆の反応もよく、報告者が現在深めている途中の研究テーマというだけでなく、広く見ても学会のコンセプトによく合致しているという評価を頂いた。発表内容は 2024 年度中に論文集の記事（仏・独・波 3 ヶ国語による論文集で報告者の記事は仏語）として出版を目指しており、現在査読を受け校正中である。

10 月末日にはワルシャワからパリへ戻り、2023 年 12 月 4～8 日には国立フリデリク・ショパン博物館（ワルシャワ）とパリの各博物館・研究機関との共催学会

「ロマン主義サークル：対話におけるフランスとポーランドの英雄」

(https://instytutpolski.pl/paris/wp-content/uploads/sites/14/2023/12/cercle_programme.pdf) で発表を行った。19 世紀のフランスとポーランド両国が関係する学際研究（美術・音楽・文学・政治）をテーマにした学会で、研究発表セッションと、パリの関連博物館（ロマン主義生活博物館、ユゴー記念館、オルセー美術館、ルーヴル美術館、ブールデル美術館等）での各館長・主任学芸員らによる所蔵品や常設展、特別展の案内が組まれた。報告者の発表では両国を跨いだ三人の芸術家（ショパン、サンド、ミツキエヴィチ）の作品の比較分析を行った。各自に与えられた発表時間が通常の学会よりも短かったため、過去一年半の自身の研究の概要程度の内容にはなったが、ポーランドとフランスから、自身のテーマに最も近い専門家が集う学会で発表できたため絶好の機会となり、ショパン博物館の学芸員をはじめ報告者のテーマに強い関心を持ったという参加者も複数いて手応えを感じた。また、ポーランド人でもフランス人でもないアジア人参加者は報告者だけだったが、にもかかわらず両言語でコミュニケーションできる点でも大変喜ばれた。この発表内容も 2024 年度中に論文集の記事（全て仏語による論文集）として出版を目指しており、現在 2 名の査読を受けている。

2023 年 12 月末にはスペイン領マヨルカ島へ渡航した。1838 年 12 月から 1839 年 2 月までの 2 ヶ月間にショパンとサンドが滞在したヴァルデモサの修道院独房（celda）が 1932 年以降博物館となっており、その博物館の現館長（3 代目）から、報告者の著書『ショパンの詩学』（みすず書房、2019 年）を購入して博物館のライブラリに入りたいとの申し出があったため、博物館見学・資料調査を含め、12 月 29～31 日の 3 日間マヨルカ島に滞在した。申請者は著書を寄贈したが、館長からは celda 滞在時のショパンの作曲に関わる研究書籍 6 点を申請者に献本頂いた上に、本研究課題に関わると考えられる約 180 年前の貴重な原資料をライブラリから次々に出してきて頂き、様々な側面から情報提供を頂いた。今回の調査によって同博物館・ライブラリが、サンド（文学）とショパン（音楽）の両方が関わるという学際的な視点でも、小規模ながらかなり稀有で貴重な研究機関であることがわかり、本研究課題にも重要なヒントをたくさん頂くことができた。同館とは今後も引き続き協力関係を築いていきたい。

2024 年 4 月 1 日より日本の研究機関のポストに就くことが決定したことから、派遣二年目は期間を短縮し、2024 年 3 月 27 日までのパリ滞在となり翌 28 日に帰国した。派遣期間中は、まず受入研究者の Françoise Lacovat 教授、そして受入研究機関（CERC）の機関長であった Emmanuel Bouju 教授に、様々な面で心遣いを頂き大変お世話になった。Lavocat 教授には特に報告者の論文原稿のフランス語校正で何度も相談に乗って頂き、おかげで現在も複数の原稿の出版を目指して先に進めることができています。また Bouju 教授は、報告者の CERC 着任時からお互いをよく知るために面談をして下さった上に、先に記した EHESS やパリ政治学院との合同セミナーも Bouju 教授が主宰しており、来てみないかと誘って下さった。前述の通り、同セミナーでは人文学のみならず政治学などの社会科学、さらには災害やエコシステムなどの自然科学という、分野そのものを跨いだ学際研究として機能しているフランスの「比較文学」を目の当たりにし、この経験が報告者自身のショパン、サンド、ミツキエヴィチ研究に 1830～40 年代のフランスとポーランドのカトリック思想や政治運動といった背景までを包含させ視野を広げさせた上に、現代の世界情勢への応用までを射程に入れるに至らせた。派遣終了（帰国）直前の 3 月 26 日には Bouju 教授と最後の打ち合わせをし、日本の研究機関に着任後も引き続き「協力研究員 chercheuse associée」という名で CERCに残ることで、共同研究がやりやすくなるよう教授が取り計らって下さった。おかげで派遣終了以後も出張でパリに戻る機会には、CERC のセミナーや会議にメンバーとして参加できることとなった。加えて現在は 2025 年度を目処に、Bouju 教授を報告者の日本での現所属機関に受け入れ、教授の日本滞在中に共同研究を実施できるよう計画を進めている。教授の滞在が実現すれば、日本における「比較文学」分野への新たなインパクトとなることを期待している。

【その他】

最後に音楽学研究者としての視点から、この二年弱の間にフランスで参加したイベントで特に有意義であったものについて記したい。パリでは Philharmonie de Paris の取り組みが素晴らしく、ここは単なる有名な演奏会場というだけでなく、子供やアマチュアからプロまで幅広い層に向けて非常に多種多様なワークショップや講義、レッスンも常時用意している。まず 2023 年は作曲家リゲティ Ligeti György Sándor (1923-2006) 生誕百周年ということで、3 月に「リゲティとアフリカ」と題されたマスタークラスが実施され、報告者も参加した。午前中はリゲティ研究者で民族音楽学者による講義、午後は打楽器奏者で民族音楽学者によるジャンベ djembé（西アフリカの打楽器）のレッスンが行われた。報告者はリゲティや 20 世紀の作曲家のスタイルを根本から熟知していなかったため、なぜそうした音

楽が「西アフリカの打楽器」に結びつくのか当初はわからなかったが、実際に受講してみて、リゲティ、ベリオ、ライヒといった作曲家たちの生み出した複雑なリズム構造やミニリズムのようなスタイルが、アフリカ特有のポリリズム的なシステムに由来していたということを、理論のみならずまさに身体的な実感として会得することができた。それは単にこうした欧米の作曲家たちが「今までの西洋音楽以上に複雑なリズムにした」という次元に留まるものではなく、そもそも西洋音楽のリズム構造を前提にしてしまうと理解できない仕組みとなっており、まるで自身の中で音楽のあり方がパラダイムシフトしたような感動を覚えた。今後、ショパンをはじめフランスやヨーロッパ全体の作曲家について歴史的に概観し、自身の講義等で伝えていく際には、「西洋音楽」が「西洋音楽」の枠組の外から作られ得ているということを自分自身が理解して伝えていかねばならないと肝に銘じた。

「リゲティとアフリカ」マスタークラスは一日だけの集中講義であったことから、こうした欧州の外に起源を持つような音楽要素について、より長いスパンで徹底的に学べる機会を引き続き得たいと考え、2023/24 シーズンはより長期的に企画されている *Philharmonie de Paris* の半年コースを二つ選択した。一つは、西洋音楽の専門家としてピアノのみならず弦楽器の仕組みも心得ておく必要を感じ、弦楽器コースを受講したが、もう一つはやはり上記アフリカ音楽講義が起爆剤となり、カリビアン音楽・リズムを知るために、トリニダード・トバゴのスチールパンのコースを受講した。このコースの講義でも、やはりアフリカや中南米の音楽を「ポリリズム」ないし「リズム」という捉え方をすること自体が欧州的発想であり、これはリズムというより「サウンド」の一種として捉えるべきという教育がなされた。改めて、自身の音楽の捉え方が一元的ないし西洋中心的となっていたことを自覚し、音楽や音そのものを捉え直すいい機会となった。*Philharmonie de Paris* のこうした世界各国の音楽に関する教育のノウハウを、日本の公的な音楽教育現場にも活かせるような機会が将来あることを望んでいる。

また 2023 年 7 月には、75 回目を迎えるエクサンプロヴァンス音楽祭を 11 日間視察した。世界的に有名な音楽祭ではあるが具体的にどういう特徴を持っているかを知りたく、今回実際に参加することで、学術的にも音楽の質的にも非常に水準の高い企画であることがわかった。日中は演奏家、作曲家、音楽祭組織メンバー等のインタビューや、一般市民向けのワークショップ（例えばブレヒト『三文オペラ』のフランス語新訳台本で今回上演されることを記念して、ドイツ語の歌詞を韻律に配慮しながらフランス語の歌詞に各自で訳してみるというワークショップで、一般市民向けとしては非常に水準の高い企画だった）が行われ、夜はオペラやオーケストラ演奏会などが毎日実施されたが、一つ一つの公演に重要な意味が持たされており（例えば、送迎バスで移動しマルセイユに近いスタジアムのような会場で、ストラヴィンスキーの三大バレエを、バレエではなく映画祭で活躍する監督らが制作した映像を付けて上演する、あるいは地中海沿岸の政治経済情勢の厳しい国・地域出身の若手音楽家を集め結成した楽団とロンドン交響楽団らとの共演で、マイアペーアのオペラ《預言者》をコンサート形式で上演する、など）、全てのプログラムが非常に充実したものであった。音楽祭実行委員会の主要なポストに音楽を扱った比較文学者が就いていたことも興味深かった。例えば日本では、こうした音楽イベントでは音楽家や音楽学者が全面的にコーディネーターとなるパターンが多いが、エクサンプロヴァンス音楽祭ではこのように学際的に音楽を扱ってきた研究者が企画を行っていることが、上記のようなプログラムの幅の広さと学術性の高さ、一つ一つの演目の充実を生み出しているように思われ、今後の日本の音楽・文化事業を考える上でも参考になる点が多いように感じた。